

自分にきく - 先生との関係 -



舞台芸術の一つのバレエでは、稽古で必ず先生、ピアニストに敬意を示すことを学びます。

そして、一緒に学んでいる仲間にも敬意を表し、見学に来られたお客さんにも敬意をはらいます。

その「心の持ち方」は、舞台上で観客に敬意を示す姿勢にもつながっていきます。

謙虚であることも学べるバレエは、お稽古ごとでも人気があるのも分かりますね。

それは、上達を焦って心が欲ばっていると「自分の体の機能を感じる力を失う」からでもあります。

先生は、生徒に体の機能を感じさせ、呼吸と一緒に動かせるように仕事に専念しています。

そうしないと、将来、生徒の体にゆがみが生じてくるのを解剖学的に理解しているからです。

マリ子ダンスシアターでも、自分が何を先生に求めているのか、見失ってしまう方もおられます。

そうなると、未来にどのような結果がおきるでしょう。

先生が個人の成長に合わせて見守る姿勢でいても、その効果が得られなくなってしまいます。

「心の持ち方」は生徒の選択によるもので、先生にはどうしようもできないのです。

こんな残念なことがおこらないように、理解していただきたいのです。

先生がセラピストでもあることを利用していないか、一度、自分の胸に聞いてみてください。

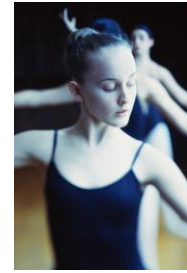
自分が先生に求めているものはどういうものですか。

このように自分を知ることは、クラスを効果よく受けることにもつながります。

「現在に目を閉ざしていると、未来に盲目になる」 - ショートフィルム - blind より -



参考に、ニューヨークのバレエスクールのアドバイスを紹介します。



あらかじめ理解しておかなければならないのは、バレエ教室とは民主主義ではないことです。

先生は一個人の流儀にかかわらず—その伝統によって稽古場では絶対的な存在なのです。

先生にどんな役割を演じてほしいか、正直に自分の胸に聞いて見ることです。



バレエの先生はクラスを効果的に教えることが与えられた仕事ですが、

気がつけばそれ以上の役割を押し付けられていたということも少なくありません。

身の上話を聞かされることも多く、これは必ずしもいいこととは言えません。



だから、この際、探し求めているのはお母さんか、新しい親友か、精神科のセラピストか、

就職のためのキャリアカウンセラーか、ダイエットのお仲間か、

またはたんにフィットネスの先生を求めているだけなのか、よく考えてみてください。

同時に、先生との関係は双方向ですから、先生側の姿勢も考えてみることに。

バレエの先生というのはほとんどの人がすばらしいものを内に秘めています。

それを引き出すのも引き出さないのも生徒次第。



そのためには自分からの最初の一步を踏み出すことに尽きます。



"The Joffery Ballet School's Ballet- Fit" より

